

時間と生をめぐって
——ハイデガーとフッサール——

名古屋大学 宮原勇

「思索していると、あたかもヘラクレイトスが
そばに立っているようなときが何度もある」
(ハイデガー)[Walter Schulz に語った言葉]

晩年になっても「現象学」という立場を結局は捨てずに、しかも存在の問いを問い続けたハイデガーは、そもそもその存在という概念でもってなにを探求しようとしたのだろうか。存在と時間との間の根源的関係を解明しようとしたとするならば、どのような洞察にたどり着いたのだろうか。

先取的に言えば、「現前」、あるいは「臨在」と訳される οὐσία、παρουσία から「自然」(φύσις)への転換後においても<現象>、つまり「時間的プロセスとしての現出」が考えられた。παρουσία の単なる否定ではない。Anwesen というよりも、「現前するようになる」、「臨在するようになる」という意味で Anwesenheit という動的な意味を含む事態であろう。

もちろん、存在といってもこれは<対象>存在に対応するものであり、いわゆる<主観>存在に対応するものではない。まずは「対象の対象性」(『ツォリコーン・ゼミナール』参照)としての存在は、「立ち現れる」こととして考えられたのであり、われわれはそれを、時間性を明示して暫定的に「時間的現出」としておく。そしてわれわれは、最終的には、このような φύσις としての時間的現出の根底には、<生ける自然>の経験が潜んでいると考える。そのような根源的経験をめぐる思索を彼の『ヘラクレイトス講義』における ζωή 概念の分析に求めたい。

しかしながら「対象の対象性」を、フッサールに倣って根本的に時間的動向が骨格を成す<現出>なる概念で言い換えたとしても、ハイデガーにおいては「意識」や「主観性」といった要素は、はなから拒絶されていた。現出や、立ち現れを語るにしても、<主観に対して現前する>とか、<意識に対して現出する>という与格(dativus)の主観を伴った表現は見いだせない。現存在(Dasein)の Da そこがそのような与格性を示しているのであろうか。ハイデガーは<主観-存在自体>を問うことの怠り(Versäumnis)を指摘するが、そういうハイデガー自

身の思索では *Anwesen* や φύσις というこで、それに立ち会う主観は一切考えられないのだろうか。

フッサールでは、初期時間論において問題化したく根源的に構成する絶対的時間意識の「無時間性」という問題では、まさに認識主観そのもののあり方が問われている。とはいえわれわれは、認識主体、あるいは自我に焦点を当てるのではなく、あくまでも対象の対象性が時間的プロセスにおいていかに生成するのかに注目する。ハイデガーとの連結点をそこに探りたいからである。ただし、その時間性というのは客観的時間性ではなく、われわれの根源的意識において自らを生成する「時間性」であり、問題はそこにある。ややレトリカルに表現すれば、それは最終的には *die lebendige Gegenwart* の有する *Lebendigkeit* を捉えようとする試みでもある。

まずはわれわれの議論は、フッサールの初期時間論の分析からはじめ、志向性自体の構造の分析、特に知覚における感覚(*eine sensuelle hylé*)と意味付与(*die beseelende, sinngebende Auffassung*)との関係、そして知覚の時間構造の分析をし(G.A. de Almeida, *Sinn und Inhalt in der genetischen Phänomenologie*, 1972 を参考にする)、改めて問題化している<知覚対象の成立と知覚作用の「同時性」>に関する議論(特に Rudolf Bernet, John B. Brough らの見解と Stefan Gerlach 2013 年の論文での批判)を検討し、知覚における *protention* の働きに注目し、再度ハイデガーに戻るとする。

そして、ハイデガーが 1930 年代に行った「プラトン『テアイテトス』の虚偽論」を検討する。そこで問題となるのは、虚偽の「思いなし」(*Meinung, δόξα*)の可能性であるが、特にわれわれは、(1)*leibhaftig* に *gegenwärtig-haben* することと(2)先行的な表象へと関わること、つまり *Vergegenwärtigung* という二重性を有する Gabel モデルに注目する。ただし、先取的に *vergegenwärtigen* されるのはアイデア、ないしはエイドスであるという洞察に注目するのではない。そうではなく、対象がまさにそこに現前するようになること、なかったものが現前するようになるといった動性が問題なのである。とするならば、対象が αἴσθησις を通じて *leibhaftig* に自らを呈示することの可能性が問題となる。

そして上記の問題を念頭に置き、1940 年代の『ヘラクレイトス』講義に注目し、ζωή 概念を検討する。ハイデガーによれば、古代ギリシア人たちにとっては、ζῶα とは、「立ち現れるものであり、その立ち現れにおいて臨在しているもの」(*die Aufgehenden und im Aufgang Anwesenden*)という意味をもち、「閃き入るものであり、現出するもの」(*die Hereinblickenden und Erscheinenden*)にもふさわしい

名称であるという (Bd.55, S.95)。それは端的には「立ち現れること」としての φύσις と根源的な繋がりがある。だが「生きるもの」、現代的には生物学的生命を意味するのではなく、いわばある時間的な形式的事態を言っている。とはいえ、ある種のエネルギーの発現を実感させる経験に対応しているように思われる。われわれの予想では、先に述べた die lebendige Gegenwart の Lebendigkeit とは、目の前の生々流転するヘラクレイトスの流れに対峙し、その生成に立ち会っているわれわれ自らの生の、つまり ζῆν(生きること)を指しているように思われる。フッサールにおいても、ハイデガーにおいても、根本的洞察は同じである。生は自ら生起する時間そのものである。〈対象〉存在は、自然としての立ち現れであり、そして同時にわれわれ自身の存在も、生としての立ち現れである。両者の立ち現れの呼応こそがこの世界の現出ということなのだろう。

[扱うテキストはフッサールに関しては、Husserliana, Bd.X と Bd.XXIV であり、ハイデガーに関しては Gesamtausgabe, Bd. 34(1931/32 年)と Gesamtausgabe, Bd. 36/37(1933/34)、そして Gesamtausgabe, Bd. 55(1943/44 年)である。]